



現代ドイツ語における機能動詞結合の通時的変化について : 学術書とフィクションコーパスを手がかりとして

今道, 晴彦

(Citation)

統計数理研究所共同研究リポート, 481:57-71

(Issue Date)

2025-03-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100493759>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100493759>



現代ドイツ語における機能動詞結合の通時的変化について

—学術書とフィクションコーパスを手がかりとして—

今道 晴彦(広島大学)

Diachronic Changes of Light Verb Constructions in Modern German

—A Study Based on Academic and Fictional Corpora—

IMAMICHI, Haruhiko (Hiroshima University)

概要

本研究では、現代ドイツ語の通時的コーパス(学術書およびフィクション)より、前置詞 *zum* または *zur*+名詞と *kommen* または *bringen* からなる機能動詞結合を抽出し、経年的増減(RQ1)と、時代差・ジャンル差の有無(RQ2)を検証した。その結果、分析対象とした機能動詞結合については、ジャンル差が最も強く見られ、次に時代差が見られることがわかった。ジャンル差については、学術書では *kommen* をとる事例が、フィクションでは *bringen* をとる事例が多く、前者では状態変化や動作に至る過程に、後者では意図的な行動に着目する表現が多いことが示唆された。また、時代差については、総頻度に着目すると、フィクションでは大きな変動が見られず、学術書では 1920 年より減少傾向を示すものの、2000 年に増加に転じることが確認された。一方、コレスポネン分析を行なった結果、近年は、具体的な動作や行動に至る過程や行動を強調する表現が顕著に見られることなどが確認された。

キーワード

機能動詞結合, 時代差, ジャンル差, コレスポネン分析

1. はじめに

現代ドイツ語に特徴的とされる構文のひとつに機能動詞結合(Funktionsverbgefüge)がある(Eggers 1973)。機能動詞結合は、名詞(たいてい動作名詞)やそれを含む前置詞句と、語彙的意味が希薄な動詞(すべてではない)が結合して特定の意味やニュアンスを表す表現のことで、言語研究では、Polenz(1963)を皮切りに、1960年代以降、Engelen(1968)やHeringer(1968)をはじめとする研究者らによって議論され、現在もドイツ語研究上の主要なトピックとして論じられている。一方で、当該表現が持つその冗長性などから文体論者などによって批判され、学術文章では、今日でもその使用を避けるほうが望ましいとする立場もある(Lieberknecht & May, 2019; Franck, 2022; Berninger et al., 2023; Kornmeier, 2024)。しかし、機能動詞結合の使用について一定の警鐘を鳴らしつつも、その長所を指摘する立場もあれば(Pospiech, 2017)、学習教材のなかに

は、学術研究を行う上で必要であるとして積極的に機能動詞結合を取り上げる上級者向けの教材もある(Schade et al., 2020; Hall & Schneider, 2022)。また、インターネット上には、ドイツの大学が公開するドイツ語学習者向けの機能動詞結合の一覧のような手引きも多数存在しており、機能動詞結合は、その使用を推奨するものからそうでないものまで、両極端の立場がある表現でもあると言える。

機能動詞結合は、中世の時代のドイツ語(Mittelhochdeutsch)にも認められる構文であるが(Tao, 2013), Eggers(1973)は、20世紀以降、名詞句の増加とともに機能動詞結合が広まったとしている。こうしたなか、たとえば Kamber(2008)など、実証的観点から機能動詞結合がどの程度使用されているのかを調査する試みもなされているが、これまでの調査はもっぱら新聞や雑誌などの時事的テキストを分析対象としており、実際に機能動詞結合の使用がどの程度拡大しているのかについては調査されていない。機能動詞結合が現代ドイツ語において顕著な言語現象であるのであれば、一定の時間幅のなかでその使用を追うことも重要となる。また、とりわけ語感のないドイツ語の非母語話者が機能動詞結合の理解を深めていく上で、その典型性について把握することは有意義だが、その際に、どういう流れを組んで今があるのかという通時的な視点も重要になると考えられる。また、どのような機能動詞結合が使用されるのかについては、ジャンルに依拠する部分が大きいとも言われており(Kamber, 2008), ジャンル間の違いや共通点も考慮に入れた分析が必要になると思われる。

2. リサーチデザインと手法

2.1 研究目的と RQ

本研究では、とりわけ大学でのドイツ語教育における示唆を得るべく学術書と、それとは性質が異なり、これまで分析対象とされることはなかったフィクションの 2 ジャンルを分析資料として、機能動詞結合の使用がどのように推移しているのかを計量的観点から考察することを試みる。分析に際して設定するリサーチクエスション(RQ)は以下の 2 点とする。

RQ1: 経年的に線形的な増減は見られるか？

RQ2: 時代差・ジャンル差は見られるか？

2.2 データ

本研究では、ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー(BBAW)の DWDS コーパスアーカイブ(<https://www.dwds.de/>)に収録される現代ドイツ語の均衡コーパスである DWDS-Kernkorpus および DWDS-Kernkorpus21 を利用し、その中に収められる学術書およびフィクションの 2 つのジャンルを分析資料とする。DWDS-Kernkorpus は 1900 年から 1999 年までの学術書、フィクション、新聞、実用書(ノンフィクション)から構成され、年代とジャンルにおける均衡性を考慮して構築されている。DWDS-Kernkorpus21 はその後継にあたり、筆者が確認する限り、最新の資料が学術書で 2006 年、フィクションで 2004 年であった(2025 年 2 月 28 日に確認)。こ

これらのコーパスは年代間の均衡性を考慮する際に 10 年を区切りとしているが、本研究では収集する機能動詞結合が必ずしも高頻度ではないため、1999 年までのデータについては 20 年を一区切りとし、2000 年以降は、DWDS-Kernkorpus21 に基づき、2000 年から 2009 年までの 10 年区切りという設定で使用頻度を抽出する。したがって、以下では、学術書およびフィクションの 2 ジャンルの(1)「1900 年から 1919 年まで(以下 1900 年～)」、(2)「1920 年から 1939 年まで(以下 1920 年～)」、(3)「1940 年から 1959 年まで(以下 1940 年～)」、(4)「1960 年から 1979 年まで(以下 1960 年～)」、(5)「1980 年から 1999 年まで(以下 1980 年～)」、(6)「2000 年から 2009 年まで(以下 2000 年～)」の 6 つの年代から機能動詞結合の使用頻度を抽出し、調整頻度に変換した上で分析を実施する。

2.3 手法

2.3.1 データの事前処理

機能動詞結合には「前置詞句＋動詞」、「名詞(主格)＋動詞」、「名詞(対格)＋動詞」などの構文パターンがあるが、本研究は、機能動詞結合のいわば典型例でもある前置詞句＋動詞のうち、最もよく使用されるとされる *zum* または *zur*＋名詞と *kommen* または *bringen* からなる機能動詞結合を分析対象とする(Kamber, 2008)。その際、語順(定動詞 *kommen* または *bringen* の位置)については、制約を設けず、定動詞と前置詞句と距離については、筆者が目視で事例を確認する限り、大半は数語以内に収まるが、少しでも事例数を増やすため、最大で 7 語までとする。

具体的には、当該コーパス検索ツールの KWIC 出力より、*zum* または *zur*＋名詞と *kommen* または *bringen* からなる機能動詞結合を含むフルセンテンスを抽出し、機能動詞結合の使用頻度を集計する。ただし、DWDS コーパスアーカイブには著作権の関係から、センテンスが表示されないデータも含まれることから、集計データをもとに再度それぞれの名詞を代入する形で個別に使用頻度の調査を行う。その上で、使用頻度表(1000 万語あたりの調整頻度)を作成するが、機能動詞結合がよく使用されると考えられる学術書においても事例数が多くないため、以下、本研究では表 1 にあげる頻度上位 50 位まで(12×50)を分析対象とする。なお、一方のジャンルにおいてのみ出現する機能動詞結合が 2 例見られたが(学術書:*zur Reaktion bringen*, フィクション:*zur Vernunft bringen*)、事例数が少なく、かつそれぞれ頻度上位が 47 位と 49 位であるため分析対象から除外しないものとする。

表 1

分析対象とする機能動詞結合の使用頻度表(12×50)の一部(1000 万語あたりの調整頻度)

機能動詞結合	W_1900	...	W_2000	B_1900	...	B_2000
zum_Ausdruck_bringen	16.61	...	19.92	2.46	...	2.59
zum_Ausdruck_kommen	19.11	...	21.17	1.16	...	1.73
zum_Vorschein_kommen	6.37	...	18.68	8.68	...	13.52
...	...	...	...	...	...	...
zum_Austrag_kommen	0.14	...	0	0.29	...	0

※表中の「W」は「学術書(Wissenschaft)」,「B」は「フィクション(Belletristik)」を示し,「_」に続く数字は「年代」を意味するものとする(以下図2も同様)

2.3.2 分析の手順

RQ1(経年的増減)では,まず,上記表1の総頻度より決定係数 R^2 を求め,2つの分野において線形的な増減が見られるかどうかを分析する。

RQ2(時代差・ジャンル差)では,表1の使用頻度表を元にして,2ジャンルの6年代からなる12の分析資料を第1アイテム,50の機能動詞結合を第2アイテムとしてコレスポネンス分析を実行し,時代およびジャンルにおいてどのような特徴が見られるのかを検証する。

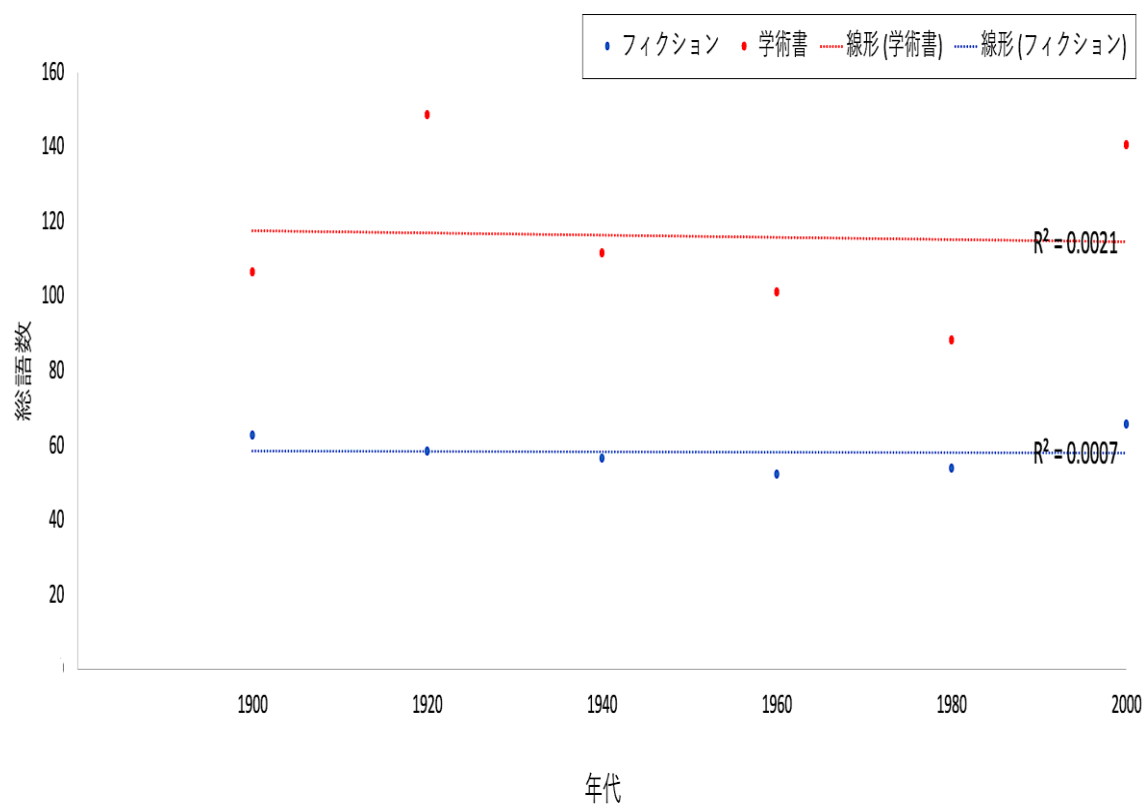
3. 結果と考察

3.1 RQ1:経年的に線形的な増減は見られるか?

以下の図1は分析対象とする機能動詞結合の2ジャンルおよび各年代における総頻度と,決定係数 R^2 を含むその回帰直線を描画したものである。

図1

学術書およびフィクションにおける年代別の総頻度の推移



機能動詞結合はとりわけ形式的な文章で使用されると言われているが、いずれの年代においても学術書での使用が多いことがここでも確認できる。また、経年的な増減に着目すると、フィクションに関しては平坦で大きな変動が見られず、決定係数 R^2 も低い。したがって線形的変化は見られず、時代差は見られないと言える。

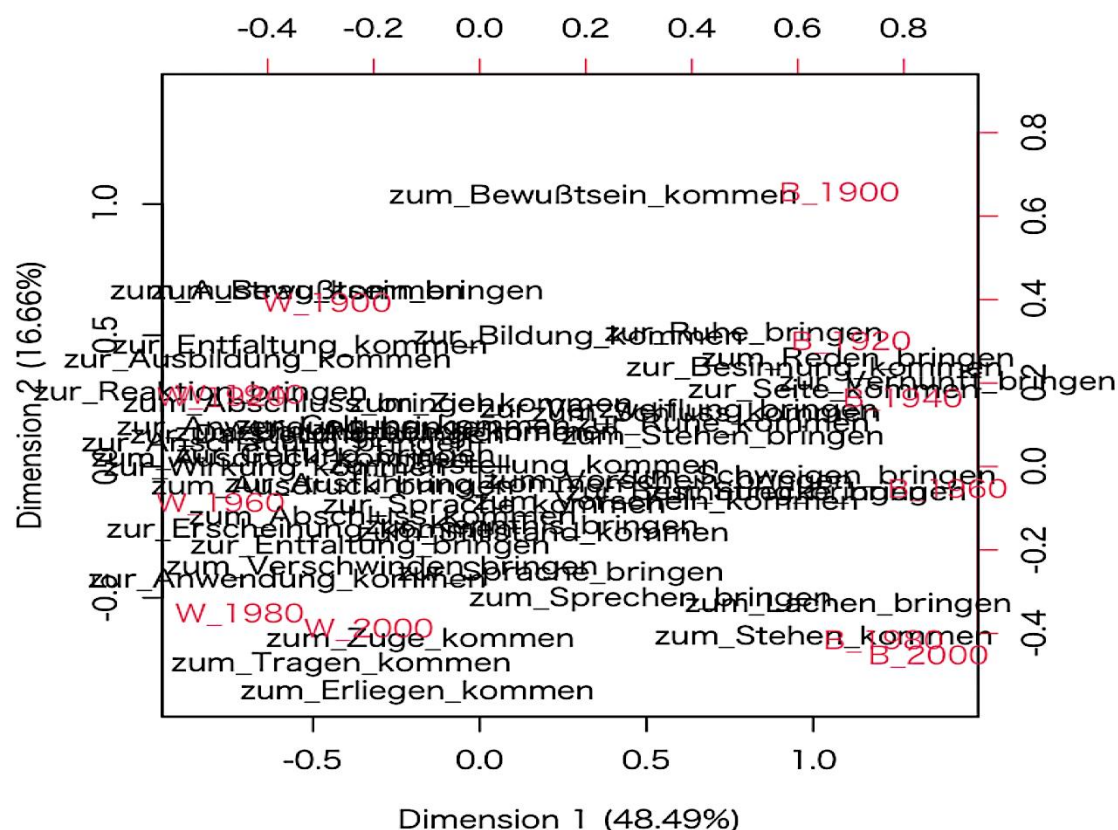
また、学術書についても、同じく R^2 が低く、線形的変化は認められない。ただし、1900 年から 1920 年にかけて増加したのち、1980 年まで減少傾向を示すが、その後再び 2000 年になって増加に転じている。今回の調査結果に従うならば、学術書においては機能動詞結合が 20 世紀に入って減少傾向にあったが近年になってまたその使用が増えてきたということになる。上述の通り、機能動詞結合の使用については批判的な見方がある一方で、肯定的に捉える見方もあり、捉え方の主流が変わった可能性も考えられる。もっとも、2000 年になって増加傾向に転じた可能性としてコーパスサイズの影響も否定できない。すなわち、2000 年よりも前のコーパスサイズは 6000 万語程度であるのに対して、それ以降のコーパスサイズは 80 万語程度に過ぎず、この点が頻度差に反映された可能性もある。こうした可能性を排除するには、今後、さらなる追跡調査が必要である。

3.2 RQ2: 時代差・ジャンル差は見られるか？

次に表 1 の学術書およびフィクションの年代別の頻度行列を用いてコレスポンデンス分析を行なった結果、図 2 が得られた。第 1 次元の寄与率は 48.49%、第 2 次元の寄与率は 16.66% となり、全体では 65% の説明力を有する次元が取り出せたことになる。

図 2

第 1 アイテムと第 2 アイテムのスコア散布図(総頻度上位 50 語)



第 1 次元を示す横軸に注目し、赤色で記した分析資料の分布を見ると、マイナス方向に(W_で始まる)学術書が、プラス方向に(B_で始まる)フィクションが分かれて布置されており、第 1 次元はジャンル差を示す軸であると解釈することができる。機能動詞結合の使用頻度はコーパスやジャンルに影響される部分が大いという上述の Kamber(2006:129)の指摘が、今回の調査からも垣間見ることができる。したがって、機能動詞結合の典型性について議論する場合、ジャンル差への配慮が不可欠であることが示唆される。

第 2 次元を示す縦軸に注目して、赤色で記した分析資料の分布を見ると、プラス方向からマイナス方向に向けて年代順に配置されており、第 2 次元は時代差を示す軸であると考えられる。年代間の距離に目を向けると、まず、両ジャンルともに 1940 年～と 1960 年～の間に原点があり、20 世紀の前半と後半以降という大きな括りが可能であることがわかる。学術書では等間隔に配置されるが、「1920 年～と 1940 年～」および「1980 年～と 2000 年～」が重なって布置されており、これらの年代は、それぞれ似たような使用状況にあると言える。フィクションでは、細部で学術書と若干の違いも見受けられるものの、概ね同様の傾向を確認することができる。20 世紀の初めと今では顕著に使用される機能動詞結合が異なるとともに、時の経過と連動していることがうかがえる。

以上のことから、個々の使用頻度に注目すると、ジャンル差および時代差が見られ、図 2 の第 1

象限は 20 世紀前半のフィクション、第 2 象限は 20 世紀前半の学術書、第 3 象限は 20 世紀後半以降の学術書、第 4 象限は 20 世紀後半以降のフィクションの領域とすることもできる。また、それぞれの領域の中間に位置する機能動詞結合は両方の性質を有していると考えられる。図 2 の黒色で記した機能動詞結合の分布に目を向けると、全体としてはほぼ左右上下均等に分布しており、原点付近にも相当数の機能動詞結合が見られる。これらについてはジャンルや時代の影響がそれほど強くは及ばない機能動詞結合と言える。以下、本研究では、「ジャンル間に見られる特徴」、「年代間に見られる特徴」、「象限ごとの特徴とそれ以外の特徴」の順に考察を進める。

■ジャンル間に見られる特徴

まず、ジャンル差の識別に関わる機能動詞結合を分析する。以下の表 3 は第 1 次元においてそれぞれのジャンルに特徴的な機能動詞結合の上位 10 例を取り上げたものである。

表 3

ジャンル差の識別に関わる機能動詞結合 (第 1 次元)

学術書	得点	フィクション	得点
zur Reaktion bringen (反応させる)	-1.59	zur Vernunft bringen (正気に戻す)	2.40
zur Ausbildung kommen (形成される)	-1.30	zum Reden bringen (話をさせる)	1.92
zur Verwendung kommen (使用される)	-1.26	zum Lachen bringen (笑わせる)	1.90
zur Wirkung kommen (作用する)	-1.21	zur Seite kommen (助ける)	1.79
zum Austrag kommen (解決される)	-1.15	zum Stehen kommen (止まる)	1.76
zur Anschauung bringen (具体的に示す)	-1.14	zur Besinnung kommen (思い直す)	1.72
zum Ausdruck kommen (表現される)	-1.12	zur Strecke bringen (取り除く)	1.65
zur Anwendung kommen (適用される)	-1.10	zum Schweigen bringen (黙らせる)	1.64
zur Entfaltung kommen (発展する)	-1.08	zur Besinnung bringen (思い直させる)	1.38
zur Anwendung bringen (適用する)	-1.03	zur Ruhe bringen (静める)	1.30

表 3 を見ると、学術書では論理的に議論を組み立てる際や、議論の進行を表す際に使用される抽象的な表現が多い。しかも、10 例のうち 7 例 (うち 1 例は重複) は、抽象的な動詞を名詞にする接尾辞 (-ung) を伴う名詞で (*Ausbildung* (形成), *Verwendung* (使用), *Wirkung* (作用), *Anschauung* (観察), *Anwendung* (適用), *Entfaltung* (発展)), 抽象性の高い動作名詞 (Nomen Actionis) である。以下の例文 (1) から (4) は、調査対象としたコーパスにより抽出した事例である。

- (1) zur Reaktion bringen (反応させる)・zur Wirkung kommen (作用する)

Um Glyoxal mit Harnstoff usw. **zur Reaktion zu bringen**, empfiehlt es sich, in der Weise zu operieren, daß der Aldehyd in statu nascendi **zur Wirkung kommt**.

グリオキサールと尿素などを反応させるには、アルデヒドが生成時に反応する(作用する)ように操作することが推奨される。(Scheiber, Johannes: Chemie und Technologie der künstlichen Harze, Stuttgart: Wissenschaftl. Verl.-Ges. 1943, S. 397)

(2) zur Ausbildung kommen (形成される)

Um 1000 v. u. Z. **kam** es hier erneut **zur Ausbildung** einer Keramikultur, ...

紀元前 1000 年頃にここで再び陶器文化の形成が起こり, ... (Lexikon der Kunst - D. In: Olbrich, Harald (Hg.), Lexikon der Kunst, Berlin: Directmedia Publ. 2001 [1989], S. 6149)

(3) zur Verwendung kommen (使用される)

So weit die Harze selbst **zur Verwendung kommen**, empfiehlt sich dabei ein Zusatz von Holzmehl (etwa die doppelte Menge); ...

樹脂自体が使用される場合, 木粉(約 2 倍の量)を加えることが推奨される。(Scheiber, Johannes: Chemie und Technologie der künstlichen Harze, Stuttgart: Wissenschaftl. Verl.-Ges. 1943, S. 485)

(4) zur Anwendung kommen (適用される)

In der Durchführung **kommen** alle vorausgegangenen Themen **zur Anwendung**.

実施においてこれまでのテーマがすべて適用される。(Schlögel, Karl: Petersburg, München Wien: Carl Hanser Verlag 2002, S. 442)

(1)は化学実験などでの「反応や作用」の意味で用いられており, (2)は文化の「形成」の意味で使用されている。また, (3)は樹脂の「使用」という意味で用いられているが, 当該事例は「もの」のみならず, 「こと」が主語にくることもあり, 用途が広い表現と言える。(4)はテーマの「適用」という抽象的な意味で使われている。

なお, (3)の *zur Verwendung kommen*(使用される)と(4)の *zur Anwendung kommen*(適用される)は意味的に近い関係にある。しかし, (3)の *Verwendung* は一般的で広い意味での使用を表すのに対して, (4)の *Anwendung* には, 今述べたように適用や応用といった意味があるため, 実際の状況に適用するといったニュアンスもあり, (3)と比較すると意味がより限定される。

また, (1)の他動詞用法である *zur Reaktion bringen*(反応させる)に対応する自動詞用法は *zur Reaktion kommen*(反応する)であるが, 例文(1)の後半で用いられているのは *Reaktion* ではなく, 「効果, 作用」を意味する *Wirkung* である。同一語の反復を避けた可能性が高いと思われるが, *zur Reaktion kommen* は反応が起こることを意味する一般的な表現であって, これから反応が始まることを強調するのに対して, *zur Wirkung kommen* は反応の結果, 効果や作用が現

れることを意味する。正確で詳細な記述が求められる学術的な文章では、微妙なニュアンスを表現する際に、機能動詞結合が重宝されている可能性があることがうかがえる。

一方、フィクションでは、作中の登場人物の心理状態の変化などを具体的に描写する表現が多いように思われる。

(5) zur Vernunft bringen (正気に戻す)

Kein Zuruf aus dem Publikum hätte sie **zur Vernunft gebracht**.

観客からのいかなる叫びも彼女を**冷静にさせる**ことはなかったであろう。(Beyer, Marcel: Spione, Köln: DuMont 2000, S. 43)

(6) zum Reden bringen (話をさせる)

Sie hatte mich vorsätzlich **zum Reden gebracht**, damit ich ihr mit dem Klang meiner Stimme verriet, wo ich stand.

彼女は私がどこに立っているかを自分の声の響きで彼女に知らせるために私を故意に**話させた**。

(Moers, Walter: Die 13 1/2 Leben des Käpt'n Blaubär, Frankfurt a. M.: Eichborn 1999, S. 609)

(7) zum Lachen bringen (笑わせる)

Seine Bemerkungen **brachten** Wolfgang unablässig **zum Lachen**.

彼の発言はヴォルフガングをずっと**笑わせた**。(Schulze, Ingo: Neue Leben, Berlin: Berlin Verlag 2005, S. 48)

(5)は「冷静にさせる」という意味で、感情的な状態を正気に戻すという点で心理状態の変化に関わる表現と言える。また、(6)は「話をさせる」という具体的な意味だが、黙っている相手が話をしやすくすることを表し、これも内的な変化に関連している。また、(7)も「笑わせる」という意味で、(6)と同じく具体的な不定詞をとるが、登場人物の心理状態をより具体的に描くことで、生き生きとした描写を可能にしている。フィクションは現実の話ではないため、臨場感を持たせることが求められる限り、機能動詞結合は、登場人物の感情やその動きを表現する働きを担っている。

また、両ジャンルにおいては、*bringen*と*kommen*の使用に違いが見られる。学術書では、*zur Reaktion bringen*(反応させる)、*zur Anschauung bringen*(視覚的に示す)、*zur Anwendung bringen*(適用する)を除く7例が*kommen*をとっている。一方、フィクションで*kommen*をとるのは*zur Seite kommen*(助ける)、*zum Stehen kommen*(止まる)、*zur Besinnung kommen*(思い直す)の3例にとどまり、他は*bringen*が使われている。このことから、学術書は*kommen*優勢で、フィクションは*bringen*優勢であることがわかる。

*kommen*には「来る」という意味があることから、状態変化や動作に至る過程や結果が強調される。一方*bringen*には「もたらす」という意味があるため、意図的に何らかの変化を引き起こすという

ニュアンスがある。学術書では客観性が重視されることから、何らかの変化やその過程を受動的に表現することができる *kommen* が多く使用され、フィクションでは、作中の登場人物の意図的な行動などを表現するために、*bringen* が多く用いられると考えられる。

■年代間に見られる特徴

次に時代差に関わる要因を探る。以下の表 4 は第 2 次元においてそれぞれの年代(「以前」「直近」)に特徴的な機能動詞結合の上位 10 例をあげたものである。直近に特徴的な機能動詞結合を見ると、*Erliegen*, *Tragen*, *Stehen*, *Sprechen*, *Lachen*, *Verschwinden* といった名詞化した不定詞が目立つ。ただし、名詞化した不定詞をとる事例は、最近現れた事例というわけではない。例えば、*zum Erliegen kommen*(停止する)が調査対象としたコーパスで最初に登場するのは、以下の例文(8)で、1928 年の学術書コーパスである。

表 4

時代差の識別に関わる機能動詞結合(第 2 次元)

以前	得点	直近	得点
zum Bewußtsein kommen (意識が戻る)	-3.16	zum Erliegen kommen (停止する)	2.77
zur Verwendung kommen (使用される)	-2.36	zum Tragen kommen (影響を与える)	2.50
zum Bewußtsein bringen (意識させる)	-2.16	zum Zuge kommen (機会が回ってくる)	2.14
zum Austrag kommen (解決される)	-2.07	zum Stehen kommen (止まる)	1.64
zur Ruhe bringen (静める)	-1.59	zur Anwendung kommen (適用される)	1.42
zur Bildung kommen (教育を受ける)	-1.47	zum Sprechen bringen (話をさせる)	1.41
zur Entfaltung kommen (発展する)	-1.44	zum Lachen bringen (笑わせる)	1.31
zum Reden bringen (話をさせる)	-1.30	zur Sprache bringen (話題にする)	1.31
zur Ausbildung kommen (形成される)	-1.25	zum Verschwinden bringen (消失させる)	1.18
zur Besinnung kommen (思い直す)	-1.14	zur Entfaltung bringen (発展させる)	1.01

(8) zum Erliegen kommen

Das Salzwerk **kam** dadurch noch vor Ausgang des Jahrhunderts **zum Erliegen**;
その結果、製塩所は予想に反して世紀末を迎える前に**停止した**。(Jahresberichte für deutsche
Geschichte, 1928, S. 417)

さらに DWDS コーパスアーカイブに収録されるその他の歴史コーパス(1465 年～1987 年)を調べてみると、最も古い事例として、Alexander von Humboldt による 1828 年の事例が抽出される。

(9) zum Erliegen kommen

Seitdem die Grube Santa Barbara **zum Erliegen gekommen** ist, ...

サンタバーバラ鉱山が停止して以来, ... (Humboldt, Alexander von : Geognostisch-metallurgischer Abriß von Amerika. 1828)

ドイツ語では動詞(不定詞)の語頭を大文字書きすることで名詞にすることが可能であるため, 機能動詞結合においてこれらの動詞由来の名詞が用いられることは不思議ではない。しかし, 今回の調査結果は, 200 年前の資料に見られるこうした事例が以前にもまして顕著に見られるようになったことを示している。これらの事例は, 動詞を名詞にした上で, 目的や到達を示す *zum* という前置詞と結合し, 何かが自然に生じることを意味する *kommen* や, 何かを意図的に生じさせる *bringen* という動詞によって導かれている。したがって, これらの事例は単なる動作を意味するものではない。*zum Erliegen kommen* は「負ける, 屈する」といった具体的な動作ではなく, それまで動いていた何かが停止する過程や, そうした変化が強調される。実例を見ると, 以下の例文(10)は自然現象としての風が, (11)は経済活動, (12)は製造といった抽象的概念が停止することを意味している。

(10) zum Erliegen kommen

Die Windfahne Richtung Pol, aber in der Kälte **kommt** der Wind **zum Erliegen**.

風向きは北極方向だが, 寒さの中, 風は止んでいる。(Schrott, Raoul: Tristan da Cunha oder die Hälfte der Erde; Hanser Verlag 2003, S. 571)

(11) zum Erliegen kommen

Das Wirtschaftsleben der Stadt würde ohne Studenten und Professoren **zum Erliegen kommen**.

学生と教授がいなければ, この街の経済活動は停止するだろう。(Safranski, Rüdiger: Friedrich Schiller, München Wien: Carl Hanser 2004, S. 307)

(12) zum Erliegen kommen

Schließlich **kam** die Produktion praktisch ganz **zum Erliegen**.

結局, 製造は実質的にほぼ完全に停止した。(Gall, Lothar: Krupp, Berlin: Siedler 2000, S. 32)

さらに, 近年は, (13)の *zum Sprechen bringen*(話させる)や(14)の *zum Lachen bringen*(笑わせる)に見るように, 日常の具体的な行動にも使用が及んでいる。

(13) Es war richtig, den Vater **zum Sprechen zu bringen**.

父親に**話させる**のは正しかった。(Hahn, Ulla: *Unscharfe Bilder*, München: Deutsche Verlags-Anstalt 2003, S. 145)

(14) Er wollte sie **zum Lachen bringen**, aber Meggie war nicht zum Lachen zumute.

彼は彼女を**笑わせた**かったが、メギーは笑う気分ではなかった。(Funke, Cornelia: *Tintenherz*, Hamburg: Cecilie Dressler Verlag 2003, S. 254)

一方で, Kamber (2008:274) が実施した *Spiegel* 誌に基づく計量的調査によると, こうした名詞化した不定詞をとる事例は決して多くはない。そのため, 定型表現と呼べるものではないが, 生産的な構文パターンであるとも述べている。今回の頻度調査においても, 決して高頻度とは言えず, *zum Tragen kommen* (影響を与える) や, *zum Stehen kommen* (止まる) は, 1980 年～に顕著に使用されたが, 2000 年以降の増加は見られない。同タイプの機能動詞結合の広がりについては一様ではなく, 必ずしも生産的であるとは言えない可能性もあり, さらなる検証が必要である。

また, 通時的特徴として, ここでも動詞の選択があげられる。以前は *bringen* をとる事例が 10 例中 3 例であったのに対して, 直近ではわずかではあるが 5 例に増えている。また, 以前は *zur Entfaltung kommen* は顕著に使用されたのに対して, 直近では, *zur Entfaltung bringen* が優勢となっており, *bringen* の使用の拡大が示唆される。だとすれば, 近年は意図的で能動的な表現が増え, 動作や行動に焦点を置く表現が以前よりも使われるようになった可能性が高い。

■象限ごとの特徴とそれ以外の特徴

最後に各象限に特徴的な機能動詞結合を表 5 にあげる。第 1 象限 (20 世紀前半のフィクション) は第 1・2 次元ともに機能動詞結合に与えられた得点が 0.5 以上, 第 2 象限 (20 世紀前半の学術書) は第 1 次元が -0.5 以下で第 2 次元が 0.5 以上, 第 3 象限 (20 世紀後半以降の学術書) は第 1・2 次元ともに -0.5 以下, 第 4 象限 (20 世紀後半以降のフィクション) は第 1 次元が 0.5 以上で第 2 次元が -0.5 以下という条件でソートしてそれぞれの象限に特徴的な機能動詞結合を抽出している。得点のソート条件をより厳しくすることで抽出数も減るが, 一定数の事例を抽出するため, 上記の条件によるソートを行った。

事例数を見ると, いずれも 20 世紀前半のほうがやや多く, 直近よりも以前のほうが特徴的に使用される機能動詞結合が多い。ジャンルについては, ここでも学術書では抽象的表現が多く, フィクションでは登場人物の意図的な行動などを具体的に描写する表現が多い。また, 年代については, 直近になると名詞化した不定詞が確かに見られるが, とくにフィクションのほうが多く, 日常の具体的な行動について描写する表現が特徴的であると言える。ただし, 近年, *bringen* をとる事例が増えた形跡はこの表からは確認できない。その限り, 先に年代間の比較で見られた *bringen* の使用の拡大については, 必ずしも顕著な特徴であるとは言い切れない可能性も考えられ, 今後の追跡調査が必要である。

表 5

各象限に特徴的な機能動詞結合

	学術書	フィクション
20 世紀前半	zum Abschluss bringen (結論を出す)	zur Verzweiflung bringen (絶望させる)
	zur Reaktion bringen (反応させる)	zur Ruhe kommen (落ち着く)
	zur Ausbildung kommen (形成される)	zum Schluss kommen (結論に達する)
	zur Entfaltung kommen (発展する)	zur Seite kommen (助ける)
	zum Austrag kommen (解決される)	zur Vernunft bringen (正気に戻す)
	zum Bewußtsein bringen (意識させる)	zur Besinnung kommen (思い直す)
	zur Verwendung kommen (使用される)	zum Reden bringen (話をさせる)
20 世紀後半以降		zur Ruhe bringen (静める)
	zum Tragen kommen (影響を与える)	zum Stehen kommen (止まる)
	zur Anwendung kommen (適用される)	zum Lachen bringen (笑わせる)
	zum Verschwinden bringen (消失させる)	zum Sprechen bringen (話させる)
	zur Entfaltung bringen (発展させる)	
	zur Erscheinung kommen (現れる)	

最後に、図 2 の原点付近に配置され、時代やジャンルの影響をあまり受けないと考えられる機能動詞結合として、*zur Darstellung kommen*(表現される)、*zum Schweigen bringen*(黙らせる)、*zum Ausdruck kommen*(表現される)、*zur Geltung bringen*(発揮する)、*zum Vorschein bringen*(明らかにする)などが見られた。機能動詞結合の使用については批判もあるが、これらは頻出の機能動詞結合でもあり、長い間頻繁に用いられてきたため、時や場所を選ばず使用される汎用性の高い機能動詞結合と言える。

以上のことから、現代ドイツ語の機能動詞結合には、ジャンルや時代の影響が見られる一方で、そうした影響をそれほど受けない事例があることがわかる。その限り、機能動詞結合の学習効率を考えた場合、こうした特性を踏まえることが重要であると言える。また、現代ドイツ語の機能動詞結合の典型性について議論する場合においても、ジャンル差や時代差を踏まえた分析が必要となることが示唆される。

4. まとめ

本研究では、現代ドイツ語に特徴的な現象のひとつと考えられる機能動詞結合の時代差およびジャンル差を捉えるべく、1900 年から比較的最近までの学術書およびフィクションを分析資料として、*zum* または *zur*+名詞と *kommen* または *bringen* からなる機能動詞結合の頻度調査を行い、どのような特徴が見られるのかを検証した。

その結果、RQ1(経年的増減)については、総頻度に基づく、2 つのジャンルで線形的な増減は見られなかったが、学術書では 2000 年になって減少傾向から増加傾向に転じることが確認された。ただし、コーパスサイズの不均衡による影響も考えられ、追跡調査が今後の課題として残った。

また、RQ2(時代差・ジャンル差)については、時代差以上にジャンル差が大きいことがわかった。ジャンル差に関しては、学術書では抽象的表現が多く、*kommen* と結合する事例が多かった。それに対して、フィクションでは登場人物の心理状態の変化に関わる表現が多く、*bringen* をとる事例が多いことが確認された。このことから、学術書では状態変化や動作の過程を、フィクションでは作中の登場人物の意図的な行動を強調する表現が好まれることが示唆された。時代差については、近年になって名詞化した不定詞を伴う事例が顕著に見られた。また、*bringen* と共起する事例の増加も見られ、意図的な動作や行動の過程を強調する傾向にあることが示唆されたが、必ずしも強い傾向とは言えず、これについても追跡調査が今後の課題となった。

機能動詞結合の使用については批判的な立場もあるが、ある動作や行動の過程や意図などの微妙なニュアンスを表現する上で重要な役割を担っていることが示唆され、それが近年顕著に見られるようになった要因のひとつになっているのかもしれない。Polenz(1963)や Eggers(1973)などは、動作様態(Aktionsart)の微妙な違いを表すのに機能動詞結合が役立っていることを指摘しているが、今回の調査結果はそれ以外にも上述のような微妙なニュアンスの違いを表現する際に機能動詞結合が重要な機能を担っていると捉えることも可能である。また、近年はそうした傾向がより強まってきていることが示唆される。しかし、そのことを立証するには、例えば一般的な動作表現との比較も必要であり、類似の動詞表現も検証しなければならない。また、本研究では学術書とフィクションを分析対象としたが、口語との違いなども踏まえるには、その他のジャンルも分析する必要がある。それらについては今後の課題としなければならない。

謝辞

本研究は JSPS 科研費(JP21K00735)の助成を受けた。

引用文献

- Berninger, I., Binckli, J., Botzen, K., Dembek-Jäger, C., Vogl, D., Watteler, O. (2023). *Grundlagen sozialwissenschaftlichen Arbeitens: Eine anwendungsorientierte Einführung*. UTB.
- Eggers, H. (1973). *Deutsche Sprache im 20. Jahrhundert*. Piper.

- Engelen, B. (1968). Zum System der Funktionsverbgefüge, *Wirkendes Wort*. Schwann. 289-303.
- Franck, H. (2022). *Handbuch Wissenschaftliches Schreiben*. UTB.
- Hall, K., Scheiner, B. (2001). *Übungsgrammatik für Fortgeschrittene: Deutsch als Fremdsprache*. Hueber.
- Heringer, H. J. (1968). *Die Opposition von "kommen" und "bringen" als Funktionsverben : Untersuchungen zur grammatischen Wertigkeit und Aktionsart*. Schwann.
- Kamber, A. (2006). Funktionsverbgefüge – empirisch (am Beispiel von *kommen*), *Linguistik Online*, 28(3), 109-132.
- Kamber, A. (2008). *Funktionsverbgefüge – empirisch. Eine korpusbasierte Untersuchung zu den nominalen Prädikaten des Deutschen*. Niemeyer.
- Kornmeier, M. (2024). *Wissenschaftlich schreiben leicht gemacht: Für Bachelor, Master und Dissertation*. UTB.
- Lieberknecht, A., May, Y. (2019). *Wissenschaftlich formulieren: ein Arbeitsbuch: Mit zahlreichen Übungen für Schreibkurse und Selbststudium*. Narr.
- Polenz, P. v. (1963). Funktionsverben im heutigen Deutsch: Sprache in der rationalisierten Welt, *Wirkendes Wort*. Schwann.
- Pospiech, U. (2017). *Duden Ratgeber: Wie schreibt man wissenschaftliche Arbeiten? Von der Themenfindung bis zur Abgabe. Für Hausarbeiten, Bachelor- und Masterarbeit*. Duden.
- Schade, G., Hufeisen, B., Drumm, S., Henning, U. (2020). *Einführung in die deutsche Sprache der Wissenschaften: ein Lehrbuch für Deutsch als Fremdsprache*. Erich Schmidt Verlag.
- Tao, J. (2013). *Mittelhochdeutsche Funktionsverbgefüge: Materialsammlung, Abgrenzung und Darstellung ausgewählter Aspekte*. De Gruyter.